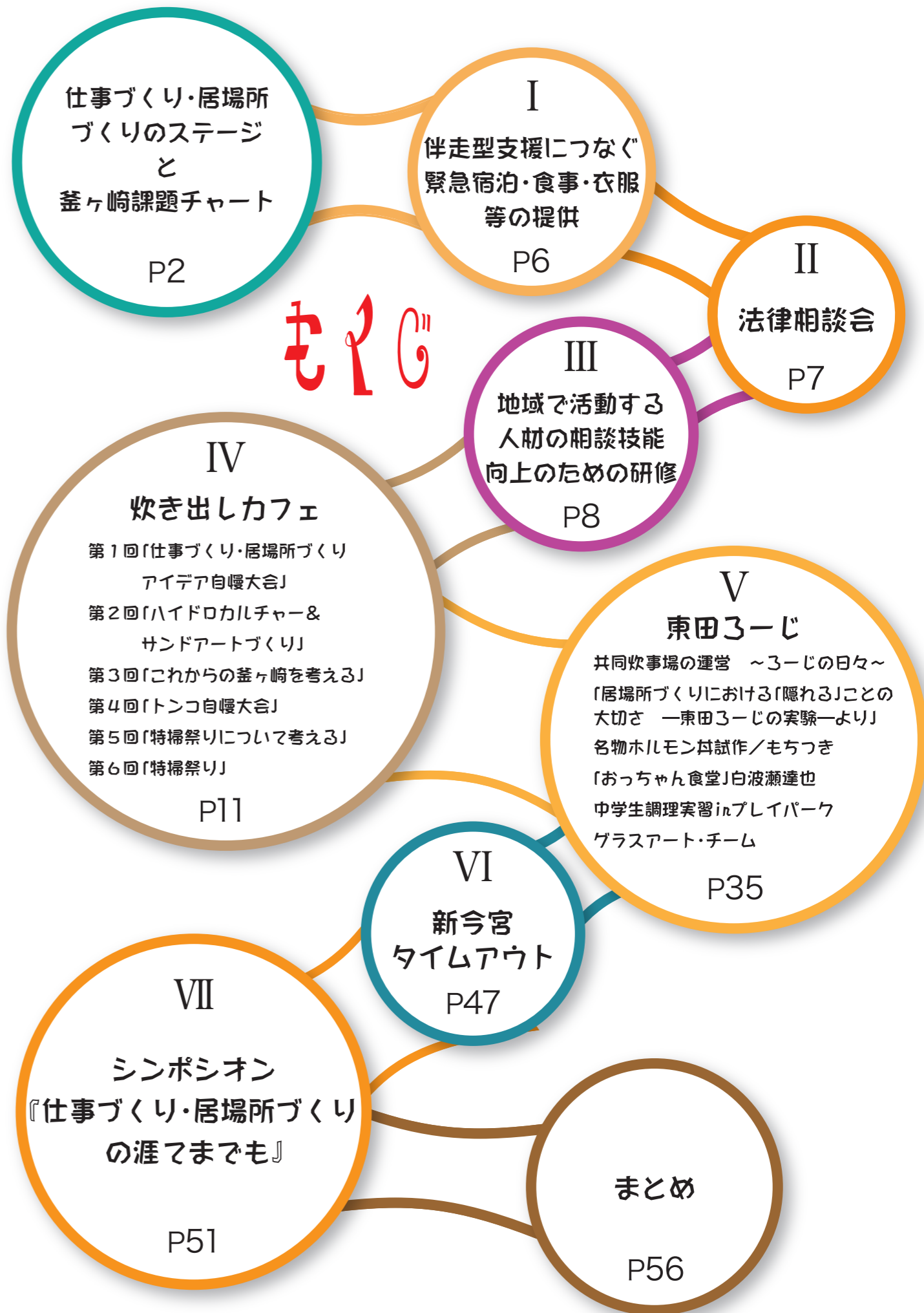


社会的つながり活性化
仕事・居場所作り事業

～ みんなで取り組む 仕事づくり 居場所づくり ～



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業



いまみや小中一貫校



1 あいりん総合センター

2 釜ヶ崎支援機構(北事務所)

KAMA PUB 4

3 あいりんシェルター

炊き出しカフェ第3回
『これからの釜ヶ崎を考える』

法律相談会 1月～

元萩之茶屋小学校



孤食を防ぎ社会的つながりを
活性化する共同炊事場・居場所

東田ろーじ 6

ひと花センター 5

炊き出しカフェ第6回
『特掃まつり』

仕事づくり・居場所づくりステージ

四角公園



10 新今宮タイムアウト

地域の情報発信、つながり活性化
仕事づくり

伴走型支援につなぐ緊急宿泊・食事・衣服等の提供

『接遇スキルUP!セミナー』『怒りについて考える』

8 釜ヶ崎支援機構(南事務所)

三角公園



7 日雇労働者就労支援センター(禁酒の館)

炊き出しカフェ
第1回『仕事づくり・居場所づくりアイデア自慢大会』
第2回『ハイドロカルチャー&サンドアートづくり』
第4回『トンコ自慢大会』
第5回『特掃まつりについて考える』

9 今宮シェルター

法律相談会 9月～12月



1 あいりん総合センター (通称:センター)

1970年に一時に1000人規模で日雇求人と求職(相対求人)ができる寄り場機能を持つ施設として発足。現在は老朽化と耐震の問題で建て替えが予定されている。リーマンショック以後求人数は激減している。



2 釜ヶ崎支援機構 (北事務所)

高齢日雇労働者に就労機会を提供する特別清掃のうち、一日200人以上を担当する釜ヶ崎支援機構の事務所。



3 あいりんシェルター

2015年12月29日から運用開始となった新築の夜間シェルターで、最大532人が宿泊できる。日中に利用できる居場所棟が現在建築途中。



4 KAMA PUB

西成区のイメージアップや地域を利用する観光客増加を目標とするソーシャルビジネス店舗。



5 ひと花センター

2013年からスタートした西成区高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業の拠点。現在約140人が登録している。登録メンバーの社会貢献意欲を活性化し、地域のニーズにつなげ、西成区のイメージアップに資することを目標としている。



6 東田ろーじ

様変わりする街の中で、ぽつんと取り残された下町風情が残る一角の民家。孤食を防ぎ社会的つながりを活性化する共同炊事場・居場所。



7 日雇労働者就労支援 センター(禁酒の館)

農作業や請負仕事を提供することで、日雇労働者の就労意欲の維持に努めるとともに、シャワーの利用、散髪、休憩場所を無料で提供している釜ヶ崎の居場所のひとつ。



8 釜ヶ崎支援機構 (南事務所)

無料職業紹介所があり、スーツ・携帯の貸出、職場体験講習などホームレス状態の方の就職活動に必要な支援を行っている。



9 今宮シェルター

2000年から2015年12月まで運用された緊急宿泊所。現在は取り壊されて、更地になっている。



10 新今宮タイムアウト

釜ヶ崎を含む新今宮周辺の情報を、まちおこしに携わる人やムーブメントにフォーカスして発信するWEBマガジン。社会的つながりやソーシャルビジネスの活性化による生活困窮者の仕事づくりへのステップのひとつ。

居場所

釜ヶ崎 課題チャート

ホームレスの自立の支援に関する特別措置法
時限立法であるため、平成29年8月に期限を迎える

シェルター

- 仕事に就けなかった日雇労働者への緊急対策として運用
- 全国でも珍しい一日のみ利用できる単泊型
- 早朝5時に閉まる／その他の窓口や居場所が開く9時頃までの空白の時間をどうするか
- 1フロア200人を越える規模の大部屋
- 建設日雇求人減少と高齢化により1970～80年代に確立された日雇労働者対策の基本が現状と合わなくなってきた

センター

- 近く建て替え予定
- 仕事に就けない人が日中の居場所として利用
- ダンボール囲いをしてひとりになれる最低限のプライベート空間
- 寄り場規模の縮小／大型飯場・ネットや携帯での求人に転換
- 生活困窮者流入の入口のひとつ
- かつては身分証明や職歴を問われず働きなおせたが、現在はそうした労働力再生機能が低下している

炊き出し

- 生命を支える最も基本的な支援
- 炊き出しに頼ってしまう傾向が生じる
- 生活保護を受けている人の利用をどう捉えるか
- 列に並び、立って食べ、食べたらすぐ去る形になりやすく、当事者による公共空間（社会的つながりの場）が生じにくい

働いた収入で暮らしたい
ホームレス生活者

500～800人(簡易宿泊所と
シェルターとを行き来する
層を含む)

日雇／特掃／アルミ缶集め
など何らかの形で働いている
ことに誇り

0.62 km²の狭い地域に人口密集、超高齢化

生活保護受給者
約8500世帯
ほぼ単身

再開発

ジェントリフィケーション

仕事づくり・ソーシャル
ビジネスの未発達

生活困窮者自立支援法

緊急一時宿泊事業(自立支援センターなど)の事業費を措置しているが、宿泊を望まない人がホームレス状態から脱出するために活用できる訓練手当等の給付がないため、路上に届きにくい施策となっている

国の就労対策

「常用就職をめざす」ことが前提
非正規雇用の拡大は、働いて暮らしていける雇用の減少。今後のホームレス化リスクの増大

仕事

ハローワーク

- 常用就職へのあきらめ
- 高齢のホームレス生活者が望む軽作業・清掃などの仕事だけでは、アパートの維持にまで至らない現状
- キレイすぎて入りにくい

特別清掃

- 高齢日雇労働者の貴重な就労機会を提供している
- 生きがい・健康の維持
- 「働くこと」による居場所としての機能
- 高齢者の中でもさらなる高齢化の進行
- 自治体単独費による事業

都市雑業

- アルミ缶集め・芝居片付け・並び屋

ひと花センター

- 被保護者のうち、社会貢献したい層の居場所として機能
- 比較的社会貢献に関心が薄い層へのアプローチが課題
- 60歳以下、生活保護受給者以外の利用方法に制限がある

福祉・医療

- 生活保護費のうち医療費の割合が過半を占める
- データをもとにした実証的な医療行為とホームレス生活者の生活感覚とのズレ
- 孤立／自己有用感の低下
- アルコール・ギャンブルへの依存
- 地域経済における医療や介護のウェイトが高いが、今後の人口減少が予測されている(将来の地域経済の空洞化)

生活保護制度の疲弊

I 伴走型支援につなぐ緊急宿泊・食事・衣服等の提供

ホームレス生活者への支援としての緊急一時宿泊いわゆるシェルターは、日本では通常1ヵ月以上宿泊してその間に支援者がアセスメントを行い、伴走型支援につなげていきます。

一戸建てやアパートのフロアを借り上げて行うシェルターも多く、そうしたシェルターでは、ホームレス生活から屋根の下への移行がなだらかな形で進んでいきます。



釜ヶ崎における緊急一時宿泊の制度は、日雇労働者への支援策として制度設計されています。日雇の仕事についたら、簡易宿泊所に泊まる。仕事にありつけなかったら、1泊だけシェルターを利用し、翌朝5時には求人する業者が集まるあいりん総合センターに行って仕事を探します。もう少しだけ長く宿泊できる仕組みとしてケアセンターがあります。ホームレス生活者のためのリフレッシュ事業として位置づけられていて、病気の症状や相談の進捗により2泊3日、1週間などの期間で利用できます。



こうした短期間の緊急一時宿泊を、やる気につながると評価する利用者もいます。5年～10年という長期間に亘って、こうした宿泊を利用し続け、定住に至らない人も多くいます。

まだ生活保護を受けることを望まず、働いて生活することを願っているため、シェルターを利用し続けるのです。

釜ヶ崎では、大規模な緊急一時宿泊が施設型で短期間の利用という形で行われているとともに、畳の上への移行は居宅保護になるという二極化が進んでいる現状を踏まえ、当事者の状況によりマッチした宿泊支援の選択肢を広げることが有効です。

伴走型支援につなぐ緊急宿泊・食事・衣服の提供では、およそ2週間程度の宿泊期間の間に、多様な支援につないで、ホームレス状態からのステップアップをめざしました。

生活保護の申請に至った人が15人、就職に結びついた人が9人、訓練事業や職場体験など就職支援に進んだ方が9人いらっしゃいました。

II 法律相談会

ホームレス状態から脱出していく場合に、法律相談が重要な役割をはたします。

2015年特掃登録者とシェルター利用者に調査を行った中で「生活保護（居宅保護）を申請するとき不安に思うこと」を訊ねたところ、生活保護に進まない主要因ではありませんが、「借金がある」「戸籍がない」など法律相談とかかわる一定のニーズがあることがわかります。

	特掃		シェルター	
	回答数	%	回答数	%
1. 生活保護を知らない	83	15.6	5	6.8
2. 年齢が若い	104	19.5	13	17.6
3. 住民票がない	111	20.9	7	9.5
4. 年金がある	88	16.5	2	2.7
5. 仕事で収入がある	30	5.6	8	10.8
6. 土地や建物など財産がある	12	2.3	3	4.1
7. 借金がある	26	4.9	0	0.0
8. 働いた収入で暮らしたい	146	27.4	23	31.1
9. 親や兄弟に連絡がいく	76	14.3	15	20.3
10. 申請手続きが心配・めんどろ	75	14.1	15	20.3
11. 役所に申請に行ったが断られた	11	2.1	1	1.4
12. 戸籍がないから	11	2.1	3	4.1
13. その他	9	1.7	15	20.3
合計	782	147.0	110	148.6

回答者 532

回答者 74

釜ヶ崎では、大阪クレサラ・貧困被害をなくす会が週1回午後の時間帯に法律相談会をオープンしています。また、伴走型支援につながると支援団体が必要に応じて法テラスや弁護士・司法書士を紹介します。そこで月1回シェルターで夜間に法律相談できる機会をつくることにしました。全6回実施しました。

【弁護士 玉野まりこ先生 プロフィール】

2015年1月弁護士登録。NPO法人子どもセンターぬっく理事。

普段は、少年事件、いじめ等の学校問題、児童福祉の問題など、子どもの権利・法律に関する仕事を多くやっています。土日も仕事をしていることが多く、夜中にビールを飲みながらメダカ10匹を眺めるのがホッとできる一時です。座右の銘は、Que sera sera（ケ・セラ・セラ）、おおらか（大雑把とも言う）な性格です。

Ⅲ 地域で活動する人材の相談技能向上のための研修

第1回 接遇スキルUP！セミナー

日時：2015年9月28日（月）16:00～18:00

場所：釜ヶ崎支援機構南事務所

参加：19人



釜ヶ崎の相談場所では、建設現場で働いてきた人が多いこともあり、声大きい・言葉づかいが直接的など、労働の様子や習慣を知らなければ、相談員がとまどってしまう状況も生じます。とはいえ、相談員が伝え方の工夫を積み重ねるにしても、相手を尊重し感謝・謙虚の心をもっていることを、好感を持たれる表情と態度で形にすることが、接遇の基本であることはわかりません。生活保護受給者への総合就職サポートのノウハウを持つテクノ経営総合研究所人材開発センターから講師に末浪昇さんを迎え、地域で活動する諸団体からの参加を加え、接遇の基本にたちかえるセミナーを開講しました。名刺交換、電話対応、クッション言葉、共感的な聴き方などを学び直す機会となりました。アンケートへの回答に「仕事現場でのトラブルに対応する方法を知りたい」などの声がありましたので、第2回でそうしたニーズに応える企画を試みることになりました。

第2回 「怒りについて考える」

日時：2015年12月16日（水）16:00～18:00

場所：釜ヶ崎支援機構南事務所

参加：21人

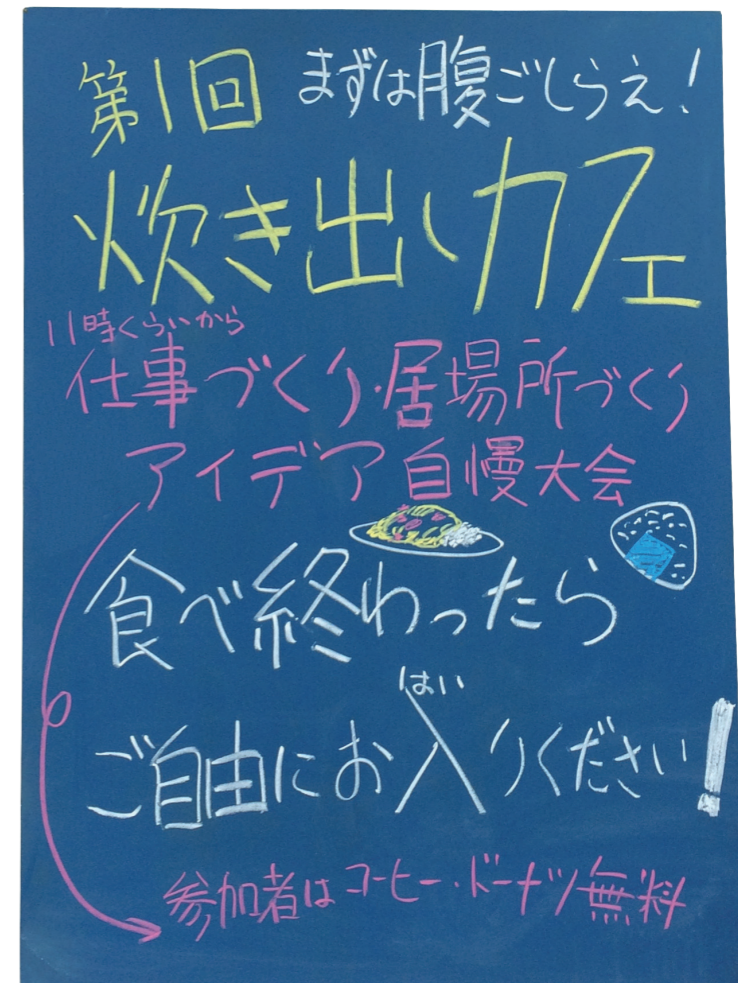


怒りは、誰にもある自然な感情です。しかし、人間関係の悪化や暴力につながることがあります。相談のいろいろな局面で怒りの扱い方に悩むこともあります。怒りをコントロールしようとしてもかえってうまくいきません。

このセミナーでは、怒りを上手に表現する方法を学ぶことにしました。講師に「男の非暴力グループワーク」を実践していて釜ヶ崎の歴史研究家でもある水野阿修羅さんをお迎えしました。

ボディワークを通して、感じ方に共通するものや違いがあることに気づくことができました。ストレスがたまった時の対し方などをグループワークで話し合いました。答えをひとつにしぼるのではなく、いろいろな対処法を他の参加者から聞いて、自分の行動にひろがりを作る機会となりました。

IV 炊き出しカフェ



腹ごしえをして、ゆっくりこれからのことを考える。

そんな場所をつくってみよう。

できることは実際してみよう。

小さな声を聴き、大きくやってみよう。

第1回「仕事づくり・居場所づくりアイデア自慢大会」

日時：2015年10月7日（水）10時～13時

場所：日雇労働者就労支援センター（禁酒の館）

参加：25人

集まりが終わった後に炊き出しがあることはよくありますが、炊き出しが終わった後に集まりがあるパターンはほとんど見かけません。「仕事づくり・居場所づくり」について自慢するのは中々ハードルが高く参加しにくいかもしれませんが、「仕事づくり・居場所づくり」についてのアイデアを自慢することなら、炊き出しカフェのスタートとして、活性化につながると考えました。カフェ形式のワークショップに残る人がいるか不安でしたが、ポスターやチラシの宣伝効果もあり、あらかじめアイデアを暖めてきてくれた人もいて、活気のある意見交流となりました。



「仕事づくり」については、

- ・ 貸し寝袋屋（レンタルショップ）をしたい
- ・ 天ぷら屋、パン屋、お菓子屋をしたい
- ・ 不用品の再活性（リサイクルショップ）をしたい
- ・ 牛乳パックを使ったアートなど手の仕事をしたい

などの声がありました。貸し寝袋屋については、路上で寝る場合、夏場は寝袋など不要ですが、寒い期間は必要です。けれども、常に携帯すると邪魔になります。そこで、寝袋を預けたり借りたりできる仕組みがあれば助かるという実際のニーズに即した意見でした。リサイクルショップについては特掃で集まる不用品の中には使えるものがあって、それらを活用したいという意向もありました。ソーシャルビジネスの中には、東京の「あうん」や兵庫のFREE HELPの例もあり続けて学んでいくことにしました。天ぷら屋などは、釜ヶ崎にはそうした小商いがかつてはよくありましたので、実地で試すこともできそうです。

手仕事をしたいという声については、第2回の炊き出しカフェにて試みることにしました。

また、炊き出し以外の共同炊事場について意見を出してもらい、東田ろーじの運営計画につなげていきました。

第2回 ハイドロカルチャー&サンドアートづくり

日時：2015年11月19日（木）10:00~13:00

場所：日雇労働者就労支援センター（禁酒の館）

参加：32人

第1回の炊き出しカフェでアイデアがふくらんでいきました。話しあい、交流することだけでも、有意義なものですが、形にしながらか試行錯誤をすることが、現実の仕事づくりに一歩でも近づく早道です。第1回の会場で「言うてるだけやったら、あかんのや。なんかせんと」とのささやきもありました。そんなささやきが出るのは、期待が高まっている証かもしれません。

ハイドロカルチャー&サンドアートは、観葉植物の鉢の部分にガラスを使い、ガラスに砂絵を作っていきます。水やりなどの手間は少なくすみ、部屋に飾るのにちょうどよく、うまくいけば販売できるようになるかもしれません。80年代に一度流行って廃れたそうですが、リバイバルなるでしょうか。はたまた完成させることができるでしょうか。好奇心と不安がまざりあう雰囲気ワークショップがはじまりました。



おそろおそろはじめてみる。



おや、意外とできてきます。



教える方もいっしょけんめい。



初めてでも、巧みな人なら、2時間できれいに完成。
これは…商売できるかも!？。



集中してきました。



手の仕事でかたちを残すのは、とてもおもしろい! 年とってもできるなあ。完成せんくても、時間を忘れて集中するのがええ。笑顔が広がって、にぎやかなカフェになりました。これは1回だけでおわらへんでえ〜。



第3回 炊き出しカフェ「これからの釜ヶ崎を考える」

日時：2015年12月26日（土）17時30分～20時

場所：あいりんシェルター

参加：21人

この冬、釜ヶ崎で路上での生活を余儀なくされている人にとって、2000年よりずっと使われていた今宮シェルターから新しく竣工したあいりんシェルターへの引越しが、関心の的となっていました。

2014年にシェルター利用者に呼びかけた「居場所づくり意見交換ワークショップ」を開催しました。あいりん総合センターの建て替えを中心に確実に変化をしていく居場所の問題について、29日から運用開始となる新シェルターを見学しながら、要望やアイデアを出し合うことにしました。



あいりんシェルターの施設を利用した炊き出しのようす。

夜間開催で、宿泊場所は別という困難があっても、話し合いは熱気を帯びてきました。このワークショップは簡易の畳の上での座談となりましたが、「畳の上でこんな風にゆっくりできるといいね」との声もありました。



ワークショップ途中でブレイクして、あいりんシェルターの施設を見学。今宮シェルターとの違いを確認しながら、要望やできることを出し合ってみました。さらにシェルターのことから、センターや釜ヶ崎の全体のことについて話題を広げました。

この日参加した人以外にも、もっとたくさんの方の意見や要望を集めて、地域の方や行政に伝えていきたいという思いができました。



「これからの釜ヶ崎を考える」意見集約

第1R

第2R (シェルター施設見学の後)

第3R (釜ヶ崎全体にひろげて)

冷暖房	暖房できたのかい	たたみのこと	畳ないのか？	声響く (イヤ)	カーテンレールをつければ	建て替え期間の場所	仕事の求人や認定車を使用する際はどこに行けばいいの？	建て替え後の規模	認定はどうか	
	夏と冬は耐えられなかった。夏…蒸し風呂 冬…冷蔵庫		ベットの畳入れて			歯ぎしりやイビキやごそごそする音気になる	カーテンない		センターが建て替えの際に大雨などの時どこにいけばいいの？	昔は活気があった
	冷暖房イイ！夏しんどかった！扇風機はちょっと…		畳入れないとギシギシうるさい (もめる原因なる)			イビキでけんかするかも	2階の通路狭い (もう少し広く)		センターは他の施設が開かない時間の休憩所として利用している	規模は小さくなくても仕方ない
	狭くてなんぎした。夏とてもあつかった。冬とてもさむかった。まわりがうるさかった。階段ののぼりがきつかった。		ベニヤだけでは腰が痛い			音の環境をよくするため所々でも仕切りが欲しい	しきりは絶対あった方がいい		建て替えの間仮設の居場所が欲しい	山谷のセンター規模では小さすぎる
	前のシェルターでしょっちゅう風邪引いていた。		荷物置き場 荷物置き場 荷物置き場を作してほしい (多くみられる声)			音の環境が悪いとけんかが起こる	ベットにカーテンをすべてにつけてほしい		今の場所に慣れている	できるころには半分いなくなってる？
	換気扇と冷暖房は感染症予防のため		背の高い人がベットに荷物置いたら寝れなくなる。			一つの部屋にたくさんベットがあるので音気になる	洗面・手洗い・トイレ		段ボールをしていて2階で休んでいる。他の施設は開く時間が限られているため	センターが仕事する気ない人ばかり、老人ホームに見える
スタッフ	前のシェルターはきたない。今はきれいになったけどスタッフの頑張りを (求める)。	施設内	床すぐ汚れると思う	シャワー環境	脱衣所必要	汚れる所 (トイレ、シャワー、洗面)	建て替えはするなら早めに	食堂関係	売店、食堂、トイレは残してほしい	
	シェルタースタッフ…頑張ってる。		前のシェルターよりきれいになったので気持ちがいい		シャワー室に靴で入るとドロドロになる	エチケットを書いてみる	建て替えは賛成だが、建て替え中使えなくなるのは困る		食堂が減ってしまった。(できればもう少し欲しい)	
洗濯	洗濯機ええのができとるわあ。洗濯機があるのがイイ！！		冷暖房があるのは助かる		脱衣室がない	ウォシュレットやと助かる	センターが閉じている間は学校を開放してくれるか	まちの話	東京に比べて大阪は汚い	
シャワー	シャワー時間15分は短い…		ラーメンのにおいどうする		シャワー、トイレの数が減った足りないのではないか	鏡がいる (1階にシャワー横にも鏡が欲しい)	2階で寝ている人増えた		大阪は福祉がしっかりしているから、福祉かかると遊んでくらせちゃう	
	シャワー短い (15分) 禁酒は無制限		掃除をしっかりとしてほしい		入口にすのこ欲しい、べちゃべちゃにならないように	使い方のルールを新しく作ってほしい	休憩できる場所を確保してほしい	建て替え後の改善点	現センターは衛生状態が悪いのできれいにしてほしい	
テレビ	今宮シェルター…TVを三角公園で見てる…		階段が広がった (これはいい)		シャワー出た後の休憩場所がシャワーの近くに欲しい	常にきれいにして	建て替え中どこに行くかが一番の問題		現センター窓にガラスがなく、ハトがすぐ穴を開けてしまう	
	(三角)公園が近くにないから、TVを見れる空間が欲しい。		階段の電気を明るくしてほしい		シャワー一段が高い	ウォシュレット好評	そのままにしてほしいという人もいるので勝手に決めてほしくない		雨の日の炊き出しができる場所に	
	TVは好きなチャンネルにできひんからあってもなくても…		階段暗い、すべる		服を入れるカゴ置いて		求人話	求人の森は職を探しやすい		
閉所時間	朝5:00に閉まるのは少し早すぎる。6:00くらいに…		2段ベットのはしごのパイプにゴムをつけてほしい (細いパイプだと膝に負担かかる)		イス欲しい			仕事の情報の近くに人が集まる		
	5月仕事が減るからGW明けシェルター利用したい。		昔より大分いい		濡れたものどうする			1階求人の森近くに人が集まる		
センター建替	建て替えたあとどうなるのかなあ。		天井が少し低い		シェルター出入り口とシャワー室の目線			センターの場所で仕事先が決まっている		
	一番いいのはあの場所にあること。		血圧計欲しい、娯楽室に	プライバシー	全くしきりが無いのが気になる			仕事紹介する場所がある		
	どこに移すかが問題！		毛布を3か月に一度ぐらいいは交換してほしい (ノミ、ダニが夏は気になる)		広いけどしきりが無い (仕切り欲しい)			仕事の話は友達伝え		
	建替反対！そのままのがイイ！	騒音	けんかの元は音		前の人が見ている気がする気になる			仕事紹介とかの関係はどうなる？どこに行くようになるのか		
	規模半分くらいになってもいけると思う。		はしごの音気になる		頭の部分だけでも仕切りが欲しい			センターの掲載求人の内容を細かく詳しく教えてほしい (実働、契約方法)		

第4回 トンコ自慢大会

～がんばるだけじゃ続かない。上手に逃げて生きていこう～

日時：2016年2月3日（水）10時～12時30分

場所：日雇労働者就労支援センター

参加：20人

社会的つながりを活性化して仕事づくり・居場所づくりに取り組んでいくにあたり、外してはいけない要素のひとつが「笑い」ではないでしょうか。笑いには通常使用している価値観を相対化し、新しく価値を見いだしていく、もしくは広げていく効果があります。第3回のテーマがとてもシビアな内容でしたので、今回はぐっと肩の力を抜ける企画に取り組むことにしました。そこで「エスケイプ」をテーマに選びました。逃げ出すことを釜ヶ崎ではトンコと言います。かつて暴力的な手配師や飯場経営者がはびこっていた時代、キツイ現場、不払いなどがあるやばい飯場からトンコすることは、日雇労働者が生き抜いていくために、時に駆使しないとイケない手段でした。「がんばるだけじゃ続かない。上手に逃げて生きていこう」と銘打ち、逃げることでよい経験となったこと・没頭できる趣味・とっておきの逃げ方・出張先で出会った凄い景色・疲れたとき、つらいときにする工夫…などなど持ち時間5分で、自由に発表していただくことにしました。



トンコ自慢大会ルール

1. 発表する方は、自分のニックネームを決めて、ネームプレートに書いて、つけてください。
2. 発表する方は、申込票にニックネームと発表のタイトルを書いてください。
3. 発表する方の定員は時間の関係で12人までといたします。先着順で、12人になりましたら、×切となります。
4. 発表の持ち時間は5分です。
5. 発表の持ち時間5分のあいだは、会場の方は感想などのコメントを言うことができません。言いつばなし、聞きつばなしです。（進行上、司会と審査員とはコメントする場合がありますので、ご了承ください）
6. 万一、5分以内に発表が終わらず、会場から「もう少しききたい」という声が出た場合は、審査員の判断により延長する場合があります。
7. 感想を話すときは、他の人の意見を否定せずに、「わたしは…と思います」の形で話します。
8. 参加賞は発表した方のみに限らせていただきます。あらかじめご了承ください。



審査員に「怒りについて考える」研修で講師だった水野阿修羅さんに引き続き起こしていただきました。また高校生の居場所づくりに取り組む office ドーナツトークの代表田中俊英さんにもお願いしました。

ルールは、自助組織のミーティング、ソーシャル・スキル・トレーニングなどを参考に考案しました。

はじめは、「トンコ」を自慢するという
ことの手ごたえがわからないため、会場の
雰囲気は沈んでいましたが、一人、二人と
話しはじめると、トンコせざるをなかった
過程や状況に共感できて、話の輪が広がり
ました。結局9人の方がエスケイプした体
験の話をしてくれました。話し足りずに2
回目をリクエストする人もいました。



審査員による厳正な審査により、トンコ自慢大賞に、「競輪選手や野球の試合を追いかけて勤め先の旅館をトンコしては必ず女将のフォローが入る板さん」を発表してくれたマブチさん、トンコ自慢準大賞に「馬で金儲けした話はないよといいつつ賭け続けた人生」を語ってくれたすーちゃん、「堀から身投げしようとして大阪城へ3回歩いて行って死にきれなかった」話をしてくれたヤマムラさんが選ばれました。



次に機会があったら、エスケイプから「しくじり」などにもテーマを広げるのもありかもしれません。

どうしてトンコを自慢するのか、考えてみました

仕事を探すこと、医療を受けること、生活保護を申請すること、親族と連絡をとること…などなど支援者はつつい前向きになろうと焦ってしまいます。

伴走型支援の局面で、善意で慌てる支援者といろいろな選択にためらいがあるけれどそのことをうまく言葉にできないために支援者から見て「エスケイプ」する行動をしてしまう人との時間の流れ方の差、経験の質の違いというものに橋渡しをする方法を探す実験はとても価値があると思います。

前向きであろうと自分に厳しくして、前ばかり見ていると、後ろから何か飛んできて危険かもしれません（たとえば言語化できていない記憶など）。また、感情の動きにおいて前向きと後ろ向きはそうそうくっきりと線引きできるものでもないでしょう。

世にある文学の名作は、ほぼ後ろ向きで、倫理規範からはみ出していたり、私的な問題だったりします。政治や経済という観点からは、物としての売り上げを見る場合以外、価値のないものです。しかしそれを読む者にとっては、経験の伝達であり、生きることの限界や社会関係の困難を知ること、かえって清々として心豊かになれたりします。

こうした効果は文学だけではなくて、うまく場面設定をすると話による伝達でも生じると思います。

今回のトンコ自慢大会では、ソーシャル・スキル・トレーニングや、べてるの家の幻覚妄想大会などを参考にしつつ、新しい寄りあいの形を模索しました。ホームレス支援においては、ビッグイシューの『路上文学大賞』の先例があります。『路上文学大賞』と較べると文字を扱うことが得意ではない人向けのよりポップな企画といえます。

ふつうマイナスの価値とみなされている姿勢や経験について、共有することは、家族や友人関係においては、一定の範囲を越えるとストレス要因となりますが、ルールを作り、出入り自由の寄り合いの中で、共有される経験には、公共性が生じる側面があります。

内面化している社会規範や自分自身の捉え方の枠を少し緩め、行動の意味合いを参加者が互いに評価することで、経験が持っている実際の豊さを言語化していくことは、否定的に捉えていた自己のイメージを、他者とのつながりの中でプラスのストロークに転換していくきっかけとなりえます。

第1回炊き出しカフェのワークショップで「社会的つながり活性化仕事・居場所作り事業」のモットーを「酒なし、金なし、自慢あり」に決めました。まだ評価されていないだけで、それぞれの人の経験と生き方の中にたくさんの自慢の種が埋まっているので、この事業を通して、「自慢」を発見し、大いに自慢していこうというのがモットーの主旨です。瞑想や克己ではなく、社会的つながりの活性化を通して、「自慢」＝「自信」を回復していく企画はもっともっと活動の領域で取り上げられた方がよいのかもしれない。

成功例をありがたがったり、理想を論じたりするだけでは、社会活動に、いわば筋力が見つからないですから。

第5回「特掃祭りについて考える」

日時：2016年2月18日（木）10時～12時30分

場所：日雇労働者就労支援センター（禁酒の館）

参加：19人

3月6日に決まった特掃祭りについて、したいこと、あったらいいなと思うこと、自由にアイデアや意見を言い合えるワークショップを開催しました。

これまで炊き出しカフェに参加してくれていたボランティアの学生さんたちが中心となって、このワークショップは企画されました。



中高年の支援者がくどくど話すより若者がアシストした方が当然盛り上がり、たくさんの意見が出ました。第6回の炊き出しカフェスペシャル「特掃祭り」に活かしていきます。



学生ボランティアのみなさま、ありがとうございます。これからも釜ヶ崎のまちづくり一緒に取り組みましょう。

第6回「特掃祭り」

日時：2016年3月6日（日）13:00-16:00

場所：ひと花センター・東田ろーじ

参加：221人

いよいよ特掃祭りの当日となりました。第5回炊き出しカフェ『特掃祭りについて考える』ワークショップで集まった意見を元に、みんなが当事者になる形で会議を重ねてきました。

昨年は特別清掃に登録する労働者が集まりやすい祭りをめざしましたが、加えて今年は生活保護へ進んだ場合も社会貢献できる場所として西成区高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業（ひと花センター）があることをわかりやすく説明できるように、ひと花センターとの共催としました。また、こどもも含め特掃に登録していない方も気軽に参加できる形にして、地域とのつながりを深めることと働く機会として特掃の仕組みを情報発信することにチャレンジしました。



一緒につくる炊き出し



炊き出しは多人数に配食するため、簡単なオペレーションになりがちです。みんなと一緒に作るからこそできる手数がある海鮮丼にチャレンジしました。うっすらとマグロが入りました。炊き出しで生ものが入るのはめずらしいことです。喫茶コーナーのさーたーあんだぎーも好評でした。

こどもといっしょに



こどもが楽しめる企画を盛り込んだところ、地域からたくさんの子どもたちが遊びにきてくれました。特撮祭りに参加した労働者にとって若い世代との交流が一番の励みです。釜ヶ崎には昔家族と暮らしていたが何らかの理由で単身生活となっている方も多いため、懐かしさもあわせて、社会との絆を確かめる機会にもなりました。

まじめに入口広い、いろいろ相談コーナー



釜ヶ崎の地域には相談する場所がたくさんあります。「病気がしんどくなった」「生活保護を受ける決意をした」など希望がはっきりしてくるまでは、相談窓口には行きづらいものですので、相談コーナーの入り口を広げました。巻き爪相談、多様な性についても相談できる社会福祉士による相談などが増えました。ハシゴをして相談する人もいて、これからの関係性づくりに努めることができました。

ものづくり



アルミ缶集めに欠かせないツールとしての自転車の整備は、とても関心が高いので、持てる技術の交流会をしました。また第2回炊き出しカフェで取り組んだガラスアートづくりと外国からの観光客の地域逗留が増加していることをにらんだ日本文化の盆栽研究をしました。

慰霊コーナー



東田ろーじの一部屋に、特掃で働いていてここ数カ月のうちになくなられた方の慰霊コーナーをもうけました。亡くなられた方を悼む機会は、セルフケアを見直す機会でもあります。宗教は自由に、スピリチュアリティも含めたエンパワメントをめざしました。

ステージ



ステージは、釜ヶ崎の労働者持ち寄りの歌やゲームが行われました。働くときに顔を合わせていても知らないままでいたいろんな人の個性や特技が見えてきました。生活が苦しくても、ホームレス状態であっても、つながり、力を合わせていくことの可能性について気づく集まりとなりました。

2年目となった特掃祭りは、パワーアップしながら地域とのつながりを深め、活動を多様化することができました。

これからも、地域に開かれた祭りとして根付いていくこと、また、ホームレス生活者や釜ヶ崎の日雇労働者が社会とのつながりを確認して、社会参加していく機会となることを、めざしていきます。

V 東田3ーじ



ひっそりとした路地にできた昭和な隠れ家。

100円出して、夕食を自分で作る。

気が向いたら手伝う。

なんで一緒にご飯を食べているのか不思議。

思わぬ出会い・ゆったりした時間。

共同炊事場の運営 ～3ーじの日々～

日時：2015年12月～2016年3月週1回～2回

場所：東田ろーじ

シェルターや特掃で案内をして、共同炊事場の利用と参加を呼びかけました。当初は、炊き出しとの違いに戸惑う人も多かったのですが、次第に新しい居場所の仕組みが口コミで伝わっていったようです。手伝ってもらい一緒にごはんを作ることは炊き出しにおいてもないわけではありませんが、民家を利用した少人数の共同炊事の場合は、より自然な形で普段炊き出しを食べるだけの人が、ほかの人を助けることになります。



居場所づくりにおける「隠れる」ことの大切さ

－東田ろーじの実験より－

家族の機能の特に重要なものの一つに、「隠れる」ということがあります。厳しい労働の環境や社会生活上の責任から逃れるとともに、語り聴くことができる親密さに自由に入り出ることができるということが「隠れる」ことの中身です。「ホームレス」とは家族のつながりと家族をベースに社会とつながる関係とを喪失していることをさしています。そこで、孤立しないように社会的つながりを増やしていこうという活動になりますが、路上にいるホームレス生活者は多様なつながりをすでに織りなして、そうしたつながりがあるからホームレスではないとはいえないように、社会的つながりが多くできたからといってホームレス状態でなくなったともいえません。「つながり」に「隠れる」という機能を足

した時に、少しだけ家族(ホーム)の機能の代替に近づくのです。「隠れる」ということは「プライバシー」と重なるところもありますが、重ならない部分も多くあります。アパートを確保できて一人で生活できるようになったら、「プライバシー」が確保されますが、家族的な機能があるとはいえません。「プライバシー」があっても「隠れる」方法が貧しいのです。

趣味を共有するサークルは隠れる機能を持っています。東田ろーじでは、昨年度自主的に始まった「男の料理教室」を継続したいと考えて、カセットコンロをいくつも置き、自分で味付けして、人にふるまうことで、教えあい、語り聴く関係が増えるように計画しました。料理という家族の機能とも縁の深いことを共有する場所であるわけです。グラスアートなど仕事づくり・まちづくりの小さな寄り場をめざす要素が自然に出てきましたが、公共性をもつ一歩手前の準備・つながりの活性化を隠れながら安心してできるということが、エンパワメントの源流に位置づくといえるかもしれません。

変わりゆく地域の中で、ぽつりと残された昔ながらの路地が残る一角にある東田ろーじは、再開発によって居場所を追われるホームレス生活者、ホームを持ってない生活保護受給者をつくる隠れ家です。隠れたオシャレなスポットを探してでかけるように、ぜひ東田ろーじにいろんな人が遊びに来てほしいと思います。手伝われますけど…。

東田ろーじのもちつき大会

日時：2016年1月16日(土)

路地に飛び出しての昔ながらのもちつきとなりました。町内に住む方からもご注目をいただきました。



地域名物ホルモン丼試作

日時：2015年12月19日（土）

仕事づくりのひとつで、B級グルメづくりにチャレンジ。高校生たちが手伝いにきてくれました。試食会をして、改良を続けていくことになりました。



『おっちゃん食堂』白波瀬達也

(Tatsuya Shirahase Blog より許可を得て転載)

2016年3月4日、釜ヶ崎支援機構が運営する「東田ろーじ」（太子1丁目）の共同食事を手伝ってきました。東田ろーじは昨年末から利用が開始され、今年に入って活動が徐々に本格化しています。正式な事業名称は「孤食を防ぎ社会的つながりを活性化させる共同炊事場・居場所運営」といいます。

東田ろーじの基本コンセプトは「仕事づくり・まちづくり寄り場」。釜ヶ崎（あいりん地区）には様々な居場所がありますが、社会的役割を構築するような仕掛けがあるところは多くありません。つまり、主客関係が固定化しやすい側面があるわけです。

そのなかであって、東田ろーじは共同炊事場・居場所の運営を通じて、社会的なつながりを図ろうとしているところに特徴があります。こうした活動の先に「仕事づくり・まちづくりという枝葉」を見据えているようです。

これまで10回ほど共同炊事をおこなってきたようですが、3月4日は肉じゃがを作りました。おおよその準備は釜ヶ崎支援機構の職員がおこなったわけですが、その後「じゃがいもが足りない」「絹さやを入れたほうがよい」などと意見が噴出し、材料を足したり、味を加えたり。何度スーパー玉出と東田ろーじを往復したことでしょう。

釜ヶ崎支援機構の利用者さんたちの活躍で、2時間半じっくり煮込んだ肉じゃががようやく完成。私が手伝っている時間帯には、安定した住居をもっていないと思われる中年の男性が2人、高齢の男性が1人食べにきてくれました。

東田ろーじは古い民家を活用しており、食器は陶磁器を使っています。釜ヶ崎（あいりん地区）でおこなわれる炊き出しの大半はプラスチック容器で提供されますし、かきこむように食べる姿が目立ちます。立ったまま食べることも珍しくありません。炊き出しのことを「エサ」と呼ぶ人がいますが、これはある意味、「言い得て妙」なのです。

一方、東田ろーじの共同炊事は、ひとり100円を払って利用する仕組み。3月4日は、晩に他の場所で無料の炊き出しがあることもあり、利用者が少なかったようですが、そのぶん、ゆっくり座って、おしゃべりしながら食事をすることができました。

当初、失業者への緊急的対応として始められた炊き出しですが、現在ではそれが恒久化しており、利用者のなかに生活保護受給者がかなり多く含まれているといわれています。こうしたことを鑑みた時、ホームレス問題が最も深刻だった時期と同程度に炊き出しをおこなう必然性はないと思われます。さりとて、いまだホームレス状態で暮らす人々は数百人規模で存在することから、炊き出しが命綱になっている側面もあります。

こうした状況下、100円で食べられる美味しいご飯は「炊き出し」と「自炊」の間を埋めるものとして大きな意味をもつといえます。炊き出しは自立を阻害する側面をもっているかもしれませんが、共同性を構築する隠れた機能をもっています。他方、自炊は自立を促進するかもしれませんが、ややもすれば孤立をもたらしてしまいます。東田ろーじの取り組みは、両者の利点・欠点を考慮したうえで、無理のない社会参加と費用負担を求めた実践といえそうです。

昨今、「こども食堂」の取り組みが全国的に急増し、マスメディアも強い関心をもっていますが、「おっちゃん食堂」の取り組みにも注目したいところ。手際の悪さが長すぎる1日を短くしてくれます。笑いも生み出します。

「非効率であることが、ある場合には合理的であるかもしれない」。そんな不可思議を体現する場として東田ろーじが脱力的に活動を展開していくことを期待しています。



中学生調理実習in元津守小学校プレイパーク

東田ろーじの共同炊事場・居場所づくりの取り組みが、西成区子育て支援室に評価され、中学生の居場所づくりに参加することになりました。いわば、東田ろーじの出前ですね。

小学校跡地で、こどもたちが水や火を使ったり、木登りや土に穴を掘ったり自由な外遊びができる場プレイパークが西成に根付いてきました。利用するのは、10歳ぐらいまでの子が多いようです。そこで、中学生が調理実習でプレイパークに来たこどもたちにランチをふるまう、調理する中学生を東田ろーじの参加者がサポートするという仕組みにしました。

学校に行きにくくなる／行かなくなる、社会から見ると時折問題のある行動をしているように見えるこどもであっても、食事をつくり、いっしょに食べることは、参加しやすく自然なつながりづくりとなります。先生や警察官など「しっかりした」大人ばかりでなく、東田ろーじの参加者がサポートすることで、それこそ「地域のおっちゃん」がかかわっている気楽さが生じました。東田ろーじ参加者にとっても、こどもたちとの協働は楽しんで取り組み、社会参加への意欲につながるものとなりました。



第1回 とん汁とおにぎり 2016年1月24日(日)



第2回 きのことスープとゴボウごはん 2016年3月26日(土)

※西成区学警連絡会、西成区役所子育て支援室、西成地区更正保護女性会と協力して実施しました。

グラスアートチームの仕事づくり

日時：12月～3月 のべ46日間 9時～13時
参加：のべ106人



炊き出しカフェ、東田ろーじの参加者の中から、第2回炊き出しカフェで取り組んだハイドロカルチャー&サンドアートづくりを継続的に取り組むチームを募集し、東田ろーじをベースに練習に励みました。

できあがる作品が次第に精巧になっていくと、たくさんの人に見てもらいたい、もしかすると買ってくれる人がいるかもしれないという希望につながっていきました。

【チーム参加者の想いや暮らし方の例】

40歳代の男性 夜間の駅構内清掃と特掃との収入をあわせて、簡易宿泊所で生活できるようになった。昼間することがないといふギャンブルでお金を使ってしまうので、集中できるグラスアートはいい。



50歳代の男性 自転車整理の仕事と特掃で、アパートでの自立生活に進んだ。療育手帳を支援を受けて取得した。グラスアートは、はじめ時間がかかったが、今はできるようになってうれしい。

60歳代の男性 年金と生活保護を組み合わせ生活できているが、グラスアートを始める前は、「TVを見てるだけで1日が長かった」「グラスアートで毎日のように、外に出るきっかけが増えた」「集中して何かをするのは、久しぶりなので嬉しい」

【思いきってフリーマーケットに出店しよう！】

大阪南港のATCフリーマーケットのアートコーナーへの出店お誘いを、連携団体であるNPO法人「こえとことばとところの部屋」より受けて、出店してみることにしました。

さて、初めての試みですが、うまくいくでしょうか。「あんたもアーティストやで」とこづきあいながらも日が近づくにつれて、緊張してきました。

ほんまにだいじょぶかあ



グラスアートチーム@ATC海辺のフリーマーケット

日時：2016年3月13日（日）
場所：大阪南港アジア太平洋トレードセンター 参加：8人



陳列したグラスアートに興味津々のお客様。しかし価格が高いのか、残念！1個も売れず。



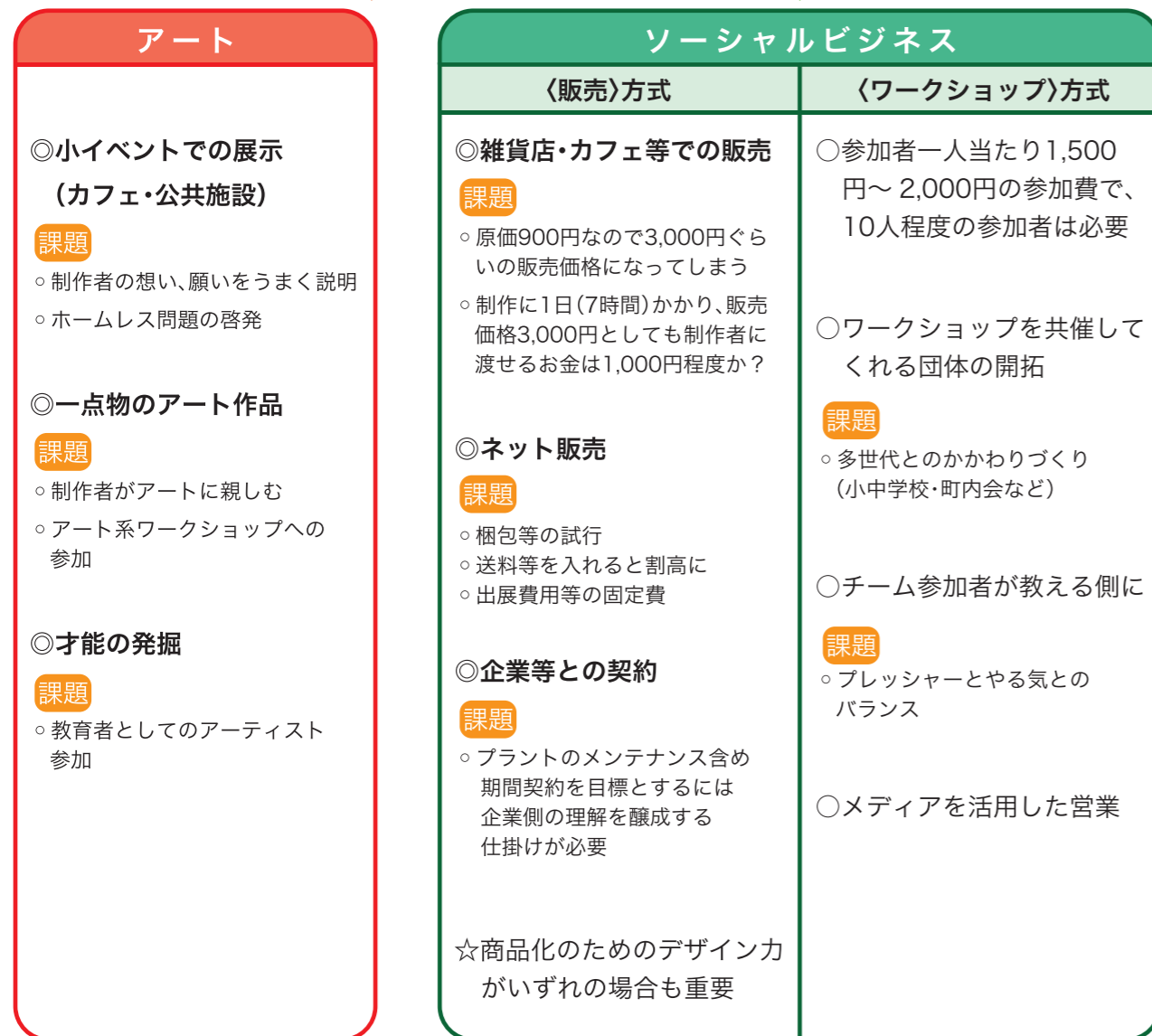
家族連れを中心に体験コーナーへ多数の参加がありました。ワークショップの形がいいのかも。

グラスアート・チームの今後の課題

ものづくりの楽しさ

没頭する時間 = 日々の悩みから自由(セルフケア)

習熟する喜び → 達成感を得る / 自己有用感の回復



課題は多いが、助成事業終了後もグラスアート・チームの活動は継続。中間的就労づくりに取り組みます！

仕事づくりについて、アイデアを膨らませると、際限なく、アイデアは膨らみ続けます。たとえば、ロフトで売っていた雑貨に、縄文土器のような縄目模様をつけたおしゃれな植木鉢があって、わざと粗い作りの仕上げで、結構な値段がついていました。これなら作れるんじゃないかと思ったりしました。

NPO釜ヶ崎では、農業就労体験をしていますので、収穫したニンニクを黒ニンニクに加工して販売しています。その他野菜についてぬか漬けを自家生産できないかと思ったりしました。

そういったアイデアの例を出すと切りがないのですが、では、たくさんのソーシャルビジネスを手掛けることができているかとうとそんなことはありません。

植木鉢でもぬか漬けでもなんでもその作業を、やりたいという人がいて、その人が、(労働法規上は若干の問題がありますが)寝食を惜しんで熱中するということがないとビジネスは始まらないのです。

人材の確保といってしまうえば、素気ないですが、人との出会いがとても重要です。出会いが重要ということについて、ソーシャルビジネスを志したことがある方なら、たぶん共感をもって理解いただけるのではないのでしょうか。

東田ろーじグラスアートチームに参加いただいている方には、制作に関して、訓練手当のような物は出ませんし、売れてないので、収入を得るまでにも至っていません。それでも時間を忘れて熱中して制作していただいているので、ソーシャルビジネスを成功させる重要な要素をすでに達成しているといえます。彼らは支援を受けて畳の上で上がる前は、路上生活やシェルター暮らしだったのですが、聞くと「自分のことをホームレスと思ったことはなかった」という方が多いです。公園などにブルーシートテントを張って住まうようになると「ホームレス」という意識が生じるかもしれません。あるいは、高齢になり、住むところがないという状況だと「ホームレス」だと感じるかもしれません。比較的若く、仕事をする気があり、仕事を探しているその過程で一時的に野宿せざるをえないという場合は、「ホームレス」という認識にはつながりません。ここに支援者との発想のズレが見出せます。

こうしたズレを、当事者ととも仕事を作っていくソーシャルビジネスの視点から見直した場合、仕事づくりへの参加に関して、「生活保護を受けて生活が安定してから」「まずは就労自立して自分で食えるようになってから」という発想を持ちつつも、相対化していく契機がでてきます。仕事づくりを実際に事業化していく練習を続けていけば、いつか起業と伴走型支援を同時並行できる仕組みを作り出せるかもしれません。

際限なく膨らみ続けるアイデアの一つを書き留めました。グラスアートや黒ニンニクやその他釜ヶ崎とその周辺の人々が手掛ける成果物を販売する道の駅があったらいいなあとかと思いつつ、左図の課題について、マメにクリアしていきたいと思います。「社会的つながり活性化仕事・居場所作り事業」終了後も小さな事業化に向けて努めていきます。

VI 新今宮タイムアウト

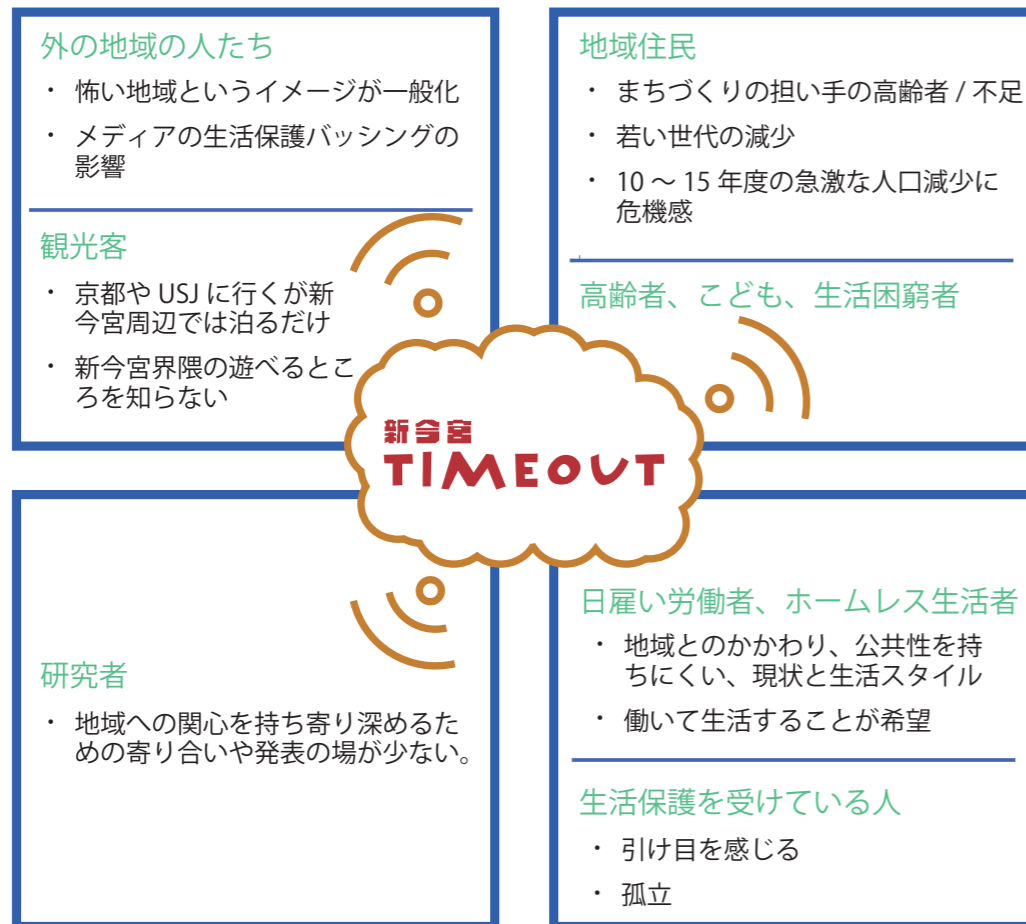


かわりゆくまちの今を切りとると
地下釜のように広がるたくさんのつながりが見えてきました。
掘出すのがもったいないような気もするプレミア感。

新今宮 TIMEOUT

地域で仕事づくりに取り組むには、まちおこしの計画に、働いた収入で暮らすことを願うホームレス状態の方や社会貢献したい生活保護を受けている方があらかじめ参画していくと、できることできないことを注意深く検証しながら、着実に進めていくことができます。地域のこれからを担う人材にフォーカスを当てるとともに、地域の情報を若い世代向けにクールに発信していくことで、地域に人材を呼び寄せる仕掛けを作りたい。釜ヶ崎を含む新今宮周辺のイメージアップを、人情味を失わずワイルドに発信したい。人が集まることを通して、つながりを活性化し、仕事づくりにつなげていく。その計画の第一弾が『新今宮タイムアウト』というWEBマガジンとして形になっていきました。

立場を尊重しつつ垣根をさげて新しい場所をつくる「新今宮タイムアウト」イメージ



URLはこちら
<http://shin-imamiya.jp/>

助成事業終了後も引き続き記事更新しつつ、まちの活性化をめざします。

あんたも人材、
私も人材



新今宮 TIMEOUT

七分五厘で生きられる街の新たな魅力——遠藤智昭のフォトグラフより——

『ここはオアシス ココローム』多田雄一

限界一のとんがり酒場で和む——KAMA PUB その1——

喫茶くつろぎで、まったり

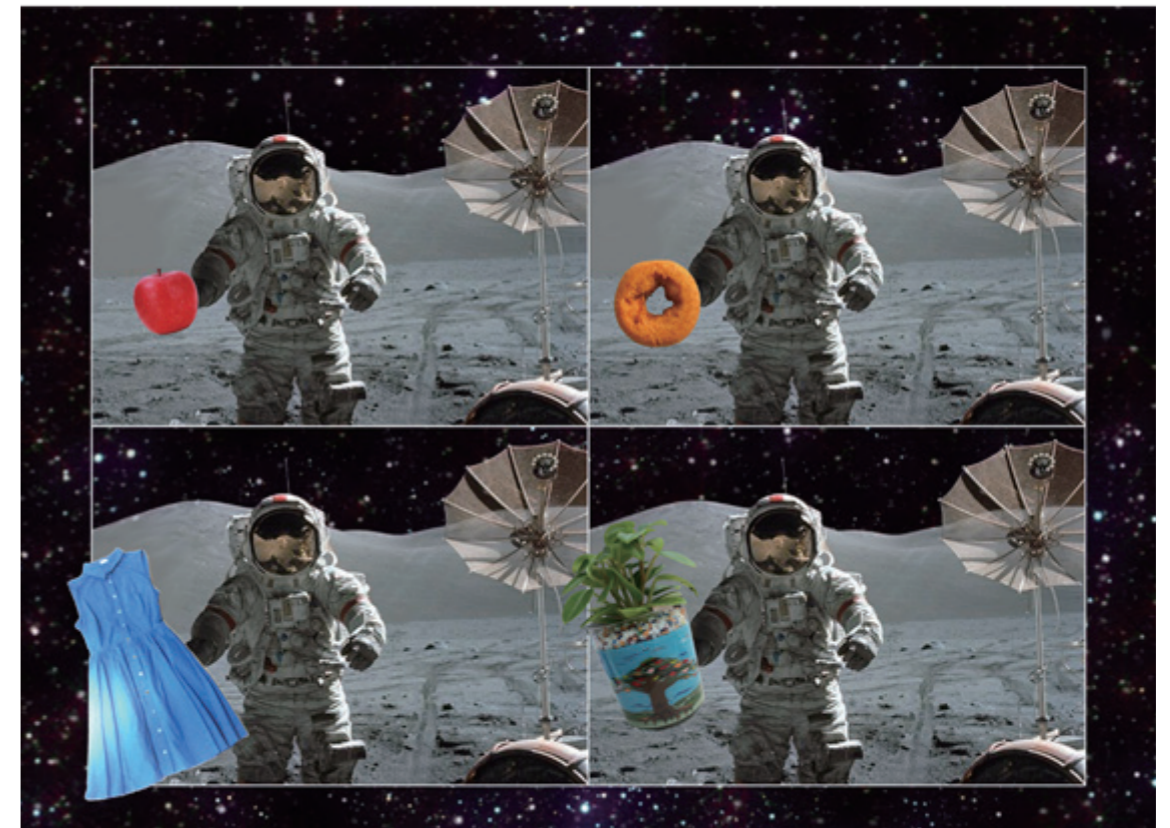
限界一のとんがり酒場で和む——KAMA PUB その2——

新今宮TIMEOUTによろこそ！
「ここ新今宮は労働者のまち」と言うと、ちょっと新鮮な響き加わる。釜ヶ崎、西成、あいりんがそれと見えばう

Recent Entries
新今宮TIMEOUTによろこそ！
七分五厘で生きられる街の新たな

VII シンポジオン

仕事づくり・居場所づくりの涯まで



まとめのシンポジウム？いえ、とてもまとめられませんでした。
苦勞や悩みを持ちよって、かっこつけすぎず言いたいことを言ってみました。
困難を耕し、苦勞をシェアするシンポジオン。
なぜだが、活気がありました。

日時：2016年3月25日（金）

場所：KAMA PUB

参加：46人（その他 Ustream で同時中継しました）

炊き出しカフェや東田ろーじで始まった新しい仕事づくり・居場所づくりのムーブメントを、現在の社会で取り組まれ始めたさまざまな活動の中に位置づけるとともに、地域の外へ発信することを願いシンポジオンを開催しました。

安定した仕事と豊かな生活とをあきらめなければならない時代に入り、社会福祉を基礎から考えなおすときが来ています。こうした世界の変容過程で、ソーシャルビジネス（SB）が、「社会的に重要な仕事」として注目されるようになりました。

このシンポジオンでは関西のSB界を破壊的理念＝価値創造的实践に基づき牽引していく方々をお呼びして、美談や成果はとりあえず置いておき、現場と経営のたのしい苦闘とそこから見たこの世界の制度・文化の涯てるところについての洞察を発表いただきました。

司会

コメンテーター



白波瀬達也さん

関西学院大学社会学部准教授 福祉社会学、宗教社会学。

著書に『宗教の社会貢献を問い直す ホームレス支援の現場から』（2015、ナカニシヤ出版）、共編著『釜ヶ崎のススメ』（2011、洛北出版）今事業の事業検討委員。



渡邊太さん

大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科専任講師 社会学。

著書に『愛とユーモアの社会運動論』（北大路書房、2012年）、『現代社会を学ぶ—社会の再想像＝再創造のために—』（共著、ミネルヴァ書房、2014年）

トーカー



「農業分野における仕事づくりから見えてきた課題—労働者参加の困難性」

綱島洋之さん
（大阪市立大学都市研究プラザ）

ひとこと

愚痴をこぼす機会をもらえてうれしいです。



「弘前ワークチャレンジプログラム～茄子と林檎の不思議な関係」

田岡秀朋さん（株式会社ナイス）
四井恵介さん（どっぴり昭和町事務局長）

ひとこと

Ust 見てないで、KAMAPUB においでよ！



「ミッションと行動指針と戦略どおりに動く」

田中俊英さん
（一般社団法人 office ドーナツトーク）

ひとこと

おもいっきりマニアックにソーシャルビジネス経営トークしてみます。みなさんをドン引きさせる自信あり！！



「地域の弱者を支える、『チャリティーショップ』という事業」

西本精五さん（NPO法人 FREE HELP）

ひとこと

廃棄される古着の大半はごみ処理工場で焼却されます。このような古着が弱者を支える力になります。

ソーシャルビジネスに関心がある方、実際に取り組んでいらっしゃる方、釜ヶ崎に関心を持っている方、釜ヶ崎で活動している方、それぞれの立場で多くの方に集まっていたきました。率直な話し合いができることを願い、ロケーションやステージングを工夫しました。



5人のトーカーからそれぞれの活動をベースに、若者や地方、産業や社会構造などに触れながら就労の領域を広げる視点が提起されました。

綱島洋之さんは、上徳谷農地再生リーダー育成事業を通して明らかになった農業分野における労働者の参加の困難性についてフォーカスし、また田岡秀朋さんと四井恵介さんからは、都市（泉佐野市）と地方（弘前市）をつなぐ就労支援カレッジ事業の自治体レベルでの仕組みづくりについて紹介いただきました。共通項である農業体験は、就労に向けた体力づくりや集中力の醸成など、個人への効果も注目されますが、どう若者と地域社会をつなぎ持続性のある取り組みにしていくのか、事業としての展開が課題になります。実際、参加者が農業を通じて身に付けていくことと、それを地域で運営する体制づくりの二つの歯車がかみ合うまでの障壁は大きく感じられます。今回、福祉分野における制度とは違う、地方創生など他領域の制度、あるいは活動、人材を組み合わせ、横断的に事業設計していくことが、突破口となりうると示唆されました。

西本精五さんからは、自身の古着を活用したチャリティショップ事業 FREEHELP についての報告がありました。古着の寄付と販売をソーシャルビジネスとし、社会的に困難な状況に置かれている人々をサポートしています。ビジネスとしての自立が問題意識としてあり、これまでに受けた助成金は40万円に抑えています。課題は社会の中の流れに溶け込むことで、アピールしなくても地域住民が賛同・参加しやすい仕組みをつくるのがポイントになります。

最後に田中俊英さんは、格差が進行する過程での社会的事業の起こし方について問題提起しました。ビジネスとして成功させているモデルは理想であるが、事業費を獲得するために多くは政府にすりよらなければならないというジレンマがあります。しかしながら、この社会で困難な状況に置かれている人たちに関わる活動、そしてその団体は、自ら発言していかなければ、本来取り組むべきことを提言できなくなります。

コメンテーターの渡邊太さんからは、成功する事例はどちらかという稀であり、失敗や困難について事例を重ねて話し合う場合は、まだ少ないことを指摘。今回のように多様な領域の人が集まる場としても、この失敗や困難の事例からの発信は分かちやすく共感を呼びやすいことが改めて感じられたシンポジオンであったと評価していただきました。

会場からの発言もあり、シンポジオン終了まで会場は活気に満たされていました。まちづくりを活性化するには、若い世代が気軽に発表や話し合いができる場をしょっちゅう開催することだ、という話があります。話題はハードだけどマルチに、刺激になるけど気軽に立ち寄れる集まりを、さまざまな団体や個人と協力してこれからも開いていきたいと思います。

まとめ

第1回炊き出しカフェで、「酒なし、金なし、自慢あり」をこの事業のモットーにきめました。

「酒なし」には「仕事でもないのにシラフで取り組む」ことの面白さアピールを込めました。アルコールとのかかわりがなかなか切れない地域ですので、トラブルを避ける目的というよりも、普段とは異なる活動の領域を開きたいとの想いでした。

「金なし」は最も共感を呼ぶかもしれません。そうした連帯感に加えて「金がなくても楽しめる・取り組めることを一緒に考えよう」という意味です。

「自慢あり」は自己有用感とかセルフ・エスティームとか言ってもよくわかりませんし伝わりにくいので、「のど自慢」「腕自慢」の自慢を用いました。

釜ヶ崎の日雇労働者の中にはとても自慢の上手な人がいて押しが強く目を引きますが、よくよく見渡すとそんな人は少数で、大方はおとなしく控えめで淡々としています。苦しい境遇を引き受けて「仕方ない」「自分が悪い」と捉えています。忍耐強い感性を持ちつつ、「働いた収入で暮らしたい」との願いを持つ人が多いことは、「働きたい」「働いている」という思いが、ぎりぎりのところで、自尊心になっているからです。

この3つのテーマについて、まだ、スタートを切ることができたと言えるぐらいの段階に過ぎません。

まちを歩いていると、東田ろーじの次の日はいつですかと訊かれるようになりました。「金なし」でも安心して休めるとともに一期一会の出会いがある新しい居場所としての東田ろーじの取組みは、試行錯誤をしつつ今後も続けていきたいと思えます。

東田ろーじがコアな人気を獲得しているのと比べますと、炊き出しカフェの方はまだ根付いているとまではいえません。ワークショップをした結果、提言につながったこと、事業にチャレンジすることなどのフィードバックをしっかりとやり、しぶとく続けることが、日雇労働者とホームレス生活者と生活保護受給者が当事者としてまちづくりに携わっていくための要となると思えます。

仕事づくりについては、もっと様々な試みをしたかったのですが、グラスアートによる中間的就労づくりがようやく端緒に着いたところです。

もっといろいろなことができたかもしれません。でもやりすぎもよくありません。足りないところをみんなで埋めていく開かれたマネジメントの必要性について、痛感した半年でもありました。法人として「社会的つながり活性化仕事・居場所作り事業」の経験を、ソーシャルインクルージョンや社会的起業のこれからの計画に活かしていくようにしたいと思えます。この報告書を手にとり目を通してくださったみなさま、仕事づくり・居場所づくりのその後がどうなったかを確かめに、ぜひ遊びにきてください。連絡先は右ページに。メールでお問い合わせいただきますと、確実です。

平成27年度 独立行政法人 福祉医療機構社会福祉振興助成事業
社会的つながり活性化仕事・居場所作り事業 報告書

平成28年3月31日

NPO法人 釜ヶ崎支援機構

〒557-0004 大阪市西成区萩之茶屋1丁目5番4号

TEL: 06-6630-6060 FAX: 06-6630-9777

<http://www.npokama.org/>

email: npokama@npokama.org

連携団体

NPO法人 生活サポート釜ヶ崎

NPO法人 こえとことばとこころの部屋

有限会社 ビッグイシュー

社会福祉法人 西成区社会福祉協議会

“酒なし、
金なし、
自慢あり”

